

ラ ビアンカ オ ストラリア出身の元キリスト教徒

:

明:田 育ちの女性が都市に引っ越し、都市生活とイスラ ムに触れます。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: サルマ クック

ED4 Aug 2014

集日 04 Aug 2014

??

ラ ビアンカは、オ ストラリア西部にある田 の 家で育ちました。彼女が幼いときはカンガルのペットを持ち、牛や羊の世 をしていました。 や狐の狩りもよくしました。彼女の教育に宗教は殆ど持ち まれませんでした。彼女は神を信じ、 的なイタリア式の 理を教え られました。イタリアの家庭では、女の子は守られ、とても保 されます。

日曜日になると、彼女は家族と教会に行ったものですが、それは表面的なことであり、彼女は何も理解していませんでした。 餐式については、白いドレスを着ていくつかの言 を唱えることだけしか知りませんでした。それが求められていたことであり、彼女はその通りにしただけなのです。ラ ビアンカにとっては、イエスとマリア（二人に平安あれ）は教会にあった 像に ぎませんでした。しかしながら、彼女は神への祈りは捧げていました。

成 の 程において、彼女はイスラ ムやアラブ人についての知 を全く持っていませんでした。彼女は16 になるまで、都市を たことすらなかったのです。彼女は自分が世 知らずのお人好しだったことを めています。その良いところとしては、よりオ プンでナチュラルでいられたことだと彼女は言います。彼女は都市の人々は感情的で、よそよそしく、批判的であることを し、田 では人々をありのままに受け止めがちであると言いま

す。

田の男性は、で一日の大半を、ごし、田生活を、します。トラック、バイク、狩、などは、男性にとっての、のようなものです。若い女性は通常、都市生活に思いを、せませす。流行りのおしゃれ、刺激、パティなどを求めます。ラビアンカは16のとき、都市生活のきらびやかさを求めて田を去りました。オーストラリア中に散らばった大きなイタリア人家族の一であるため、都市に住む叔母の所に滞在することはラビアンカにとって、いいことではありませんでした。

ラビアンカは受付としての最初の仕事を見つけ、そこでタスニムという名の、南アフリカ出身のムスリム女性と知り合いました。彼女は、実践的なムスリムではなく、ヒジャブをまとうことも礼をすることもありませんでしたが、イスラムの食定には常に、ついていました。彼女は、を守り、アルコールも、みませんでした。早い、に、宅する限りは、にそれを、されていたため、ナイトクラブで踊ったりしていました。ラビアンカがタスニムから学んだ主なことは、ラマダンの断食でした。

ラビアンカは、常にムスリムたちに惹きつけられていたと回想します。なぜなら彼女らが出会ったムスリムたちは家族のように温かく、友好的で素直だったからです。彼女はムスリムの友人たちとの、睦を、しみ、彼らの家族の、は、自身の田生活（おいしい手料理や丁寧なもてなし）を思い起こさせました。彼女はお互いに打ち解けている人々と共にいることが彼女も打ち解けさせるのだと述べています。彼女はまた、都会の人々は自分たち自身に、足していないため、他人の、ばかりするのだと言っています。

彼女は、その温かさと社交性から、特にアフリカの人々が好きだとし、ヨロッパ文化は冷たく、人々の、に、えない壁があると言います。彼女は兄妹と共に子供代、ヨロッパ系よりもアボリジニ系とよく、んでいたそうです。彼女の父は、よく、いて正しい行いをする人は、に、しても敬意を示していました。彼は人、差、主、者では全くありませんでした。しかしラビアンカの母は人、差、主、者で、ヨロッパ人が最も、れた人、だと信じており、他人をよく批判していました。

ラ ビアンカがムスリムたちとの友好 を深めていくと、彼女はムスリムたちが一日に五回の礼 を捧げていることを知りますが、彼女が本当にイスラ ムのことを知ったのは、彼女の夫と出会ってからでした。

ラ ビアンカによると、夫と知り合っただけで、彼は彼女を 家に れ って母 に会わせたそうです（彼の父 は数年前に他界していました）。彼とラ ビアンカは共に、末 い を望んでいました。それはつまり、 婚と家族生活でした。彼女はイスラ ム クラスに通い出し、服装を え始めました。彼女は いスカ トとゆったりしたシャツを着るようになりました。彼女は全能の神について学ぶことは、至 理にかなったことだとしています。すべては 和しており、美しいと感じたそうです。

彼女は、人の行いには必ず 果が伴うという考え方に共感したと述べています。人は良い行いに励まなければならないのです。このことは彼女が育てられたカトリックの教えとは なるものです。そこでは人がどのような行いをして、キリストが取り ってくるからです。

各人には が され、ラ ビアンカのそれはヒジャ ブをまとうことでした。彼女によると、自身の印象が わってしまうことが、彼女にとって最も困 なことだったそうです。田 の家や 、または において、人々はなぜ「それ」を付けているのかと ねたそうです。それにも わらず、彼女は 衣とスカ フを着用し けました。

当初、彼女の父 は、彼女が彼らの好む服装をしないことは、彼の友人たちに して失礼だと感じていました。彼女も当 は父 がそう感じていることに罪 感を抱いていましたが、全能なる神に して成 し ける意 は、いかなる人 よりも神にとって好ましいことをすることこそが重要であることを させたのです。

彼女は自分の中で、いかなる もしないことを 心していました。彼女は正しいことをしていること、そして を始めるとそれは止まらず、やがてはイスラ ムがまったく残らなくなることを知っていたからです。それだけは避けなければならないと彼女は思っていました。

始めはそれを着けることに困 を出していましたが、ヒジャ ブは彼女にとってとても理にかなったことでした。彼女が身体を覆い始めると共に、ガ ルフレンドを求める男性は寄り付かなくなっし、敬意を示されるようになりました。それは正しいことだと心から思えたのです。またラ ビアンカは、女性は宝ものであり、それは手厚く守られ、それに する者だけがそれを ることが出来るという考え方がとても素 だと感じていると述べています。

ラ ビアンカは友人たちの小さな集まりの中でシャハ ダ（イスラ ム改宗のための信仰 言）をしました。彼女はイスラ ムが真 であることを 信し、より多くを学びたいと感じたためです。彼女の夫と彼の家族は彼女がヒジャ ブをまとうことを めましたが、彼女がそれを 切に着用できるようになるまでは、ある程度の がかかりました。人は外 によって判断されるという考え方を える必要があったからです。

彼女の改宗に するムスリム コミュニティの反 について かれたとき、彼女は新ムスリムになったことで自分が「flavor of the month（物珍しさから の人になったこと）」だったと言っています。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/1188>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。